デュルク・ファン・ホッヘンドルプの思想と行動

――オランダ植民史断章――

田淵保雄

【要約】本稿はヨーロッパを震源地とした、東南アジヤ、特にジャワにおける植民政策の変化の相と英蘭軍事抗争の姿を、ルッソー的人物、ホッヘンドルプに焦点を合せて述べたものである。

十八世紀中葉から十九世紀初頭にかけて東南アジヤの植民地にも可成激しい変動があった。マゼラン海峡からケープまで、その国旗を翻えしていた旧植民帝国オランダは、大革命の結果、本国ではフランスの保護下におかれ、海外では新進英国の産業資本の前に圧倒されて昔日の威勢を失墜する。同時に旧来の「東印度会社」的な植民行政はここに変更を余儀なくさせられる。オランダは一方では自己を産業資本的に作りかえながらも、一方においては必ずしも産業資本体制に順応できず、結局、「商業体制」「強制栽培制度」に逆行する。彼は旧来の東印度会社的収奪の対象であった植民地を、土地改革により原住民に個人化を徹底させて商品作物を奨励し、これらの政策を通じて市場としての植民地に変化させようとした。彼の意図は大革命の精神、即ち時代精神を植民地に適応せんとしたものである。フランス革命の「東南アジヤ版」といえよう。

史林　四九巻一号　一九六六年一月

概　観

わが西洋史学界では植民史に関して、あまり問題は提出されていないようであるが、海外では、特に東南アに関する研究は可成進んでいるようである。英国・和蘭に所蔵されている資料もこの頃では話によると開放されて自由に接近できる状態になってきているので根本資料によるこの方面の研究は容易になってきている。殊に、東南アに英国が強力に進出してくる十八世紀中葉まで、その国旗をわが長崎をも含めて翻していた和蘭の勢力は何としても吾々の手によって究明されなければならないような気持に駆りたてられる。また、当方面の研究を強力に刺戟する客観的条件は熟しつつあるのである。最近に出版され手許にはいったものだけで

も次のようなものがある。

1) Coolhaas; Critical Survey of Studies on Dutch Colonial History (1960)
2) Treggoning; Modern History of Malaya (1964)
3) Tarling; British Intervention in Malaya 1867–77 (1960)
4) Tarling; Anglo-Dutch Rivalry on the Malaya World 1780–1824 (1962)
5) Tarling; Piracy and Politics in the Malay World (1963)
6) Cowan; Nineteenth Century Malaya (1961)
7) Makks; The first contest for Singapore 1819-1824 (1959)

1 本稿はホッヘンドルプについて述べるのが目的であるが、彼の業績を明らかにするためには彼の属した時代を克明にしなければならない。

十八世紀末から十九世紀にかけては世界は大変動期にはいり、ヨーロッパを震源地とする噴火山はヨーロッパの枠を越えてアジヤに深刻な影響をあたえた。国家形態・国家観だけではなく思考形式・生活様式にも大なき変化をもたらした。①

この時期は所謂、商業資本から産業資本に転換せんとした時代である。重商主義と一般に言われている植民地支配形式から、スミスによって叫ばれたように自由主義貿易に転変する時期といえる。Raffles はこの点に見事な表現をあたえているので引用する。

商業に専念しているオランダの天才たちも次のようなことを発見することはできなかった。つまり、小規模の資本でより大きい利益を考えるよりも、大規模の資本でより少い利潤を計る方が結局は有利であるということである。②

即ち、古い時代の植民地行政——これは近代的な意味では行政という名に値しない——は物資の集積場とその周辺の治安の確保のみを要求するもので、例えばかの悪名高い「強制栽培制度」(Cultuur Stelsel) を実施したファン・デン・ボスは、外領（ジャワ以外の領土）はオランダにとっては負担であるといっているように後背地全体を市場とみて、それに必要な行政区劃をあたえるという性質のものではなかった。商業というのは本来の純粋の意味ではギリシヤ人がいみじくもみたように、一種の掠奪と同じことである。海賊の神と商業の神とは祖先が共通である。つまり本国と植民地の間にある需要と供給の落差を利用して稼ぐものであって、商品のもつ本来の価値を正当に表現することなしに利益をむさぼるのが商業資本、商業体制 (Stelsel van Handel) の性格である。そこでは経済外的な作用が大きな要素とならなければ

ならない。物品取扱の独占、政府と商業団体との癒着、最も少い資本で最も多くの利潤を獲得するための軍事組織、植民地における商業の自由の厳禁、これらを綜合した完全独占体制などがこれである。これはオランダだけではなく、英国の東印度会社にしても同じことである。産業革命が進行し、その結果、怒濤のような商品の大軍が押し寄せるまでは植民地を持つことの意味に根本的な変化はなかった。シンガポール大学のトレゴニング氏は言っている。

十九世紀後半にはいって始め内部的にヨーロッパ人の影響をうけるようになったのである。③

西班牙・葡萄牙・和蘭がアジヤにきても、アジヤは本質的に変ったわけではない。掠奪の対象としての印度が、瓜哇（ジャワ）があっただけのことで、一握りの兵士と一握りの船舶が硝煙と交換に物資を吸いあげたとしても、それは別段何ということではなかった。アジヤ的停滞性と封鎖性はそのようなことによって打ち破れる性質のものではない。

従来のV・O・C（和蘭東印度会社）体制内ではホッヘンドルプのような人物の出る余地はなかったのであるが、「商業資本」から産業資本に転換する時点において、時代精神に指導原理を発見してこれに精力的に直進する「ルッソー」的人物が出てきたのである。原住民の福祉という言葉も、実は商業体制の属性である経済外手段から産業資本へと移行してゆく過程において始めて問題にされたのである。彼の思想、軍事、行政上の考え方もそれらが可能である体制が準備されていたことを見逃してはならない。

2　仏蘭西革命の嵐は深刻であった。この論考に必要な範囲でいうならば、私有財産制の一般化である農地改革とそれにともなう個人主義的立法は、当然植民地においてもこれを適用せんとする考え方を生じさせる歴史的背景となった。植民地は正の意味でも負の意味でも本国の模写である。産業資本の要求は本国においては国内市場の完全統一であったと同時に植民地においても、アジヤ的閉鎖社会の打破という形になって表現される。即ち村落的土地所有形態、総有形態を廃して、市場としての植民地、本国商品を捌くための植民地に変化させようとする。ホッヘンドルプは明かにこの点を目的意識的に指向している。次の文は全たく「スミス」的であるから引用しよう。

政府による強制と管理は産業を枯死にはみちびく。自由なくして商業は栄えない。このことは経験と理性が証明している。④政府のしなければならないことは農業と工業を奨励することである。

仏蘭西革命の嵐は決してヨーロッパ内にだけ留っていなかった。軍事思想・人道主義を調和させた彼の考えが、瓜哇の土地所有形

態に集中されたのも、大革命を遥か遠くの東インドで体験した結果である。彼はすぐれて時代の子であった。彼に反対した人達は、ヨーロッパにおいては革命は通用するが、植民地においては必ずしもその成果は適用できないという考えの持主である。「東印度は吾が共和国の一員である」と彼は叫んも、それは従来の頭脳では受けいれられない思想である。ユトレヒト大学の領学 Gerretson は次のように言っている。

革命の進行にともない、東印度においても封建制の廃止と個人の自由、通商耕作の自由が土地私有の基礎の上に促進された。[5]

大革命は精神的には個人主義を、物質的には私有財産制の確立をもたらして近代的財産形態を規定し、産業革命はあらゆる労働が均一に貨幣化されうる基礎を用意した。これらの中には人種民族を一般化する汎世界的なものが含まれている。この歴史的現象は当然、植民地においても在来のV・O・C的な統治形態である経済外的収奪と貿易独占を保持せんとする人達に対して、継続的にその矛盾を叫ぶ一連の人達を一つの類型として蔟出するのである。即ち、ホッヘンドルプはその後継者として偉大なる英国の行政官ラフルスをもち、ラフルスはムチンゲ、エラウトを、彼に直接つらなるフーフェルを呼び出す。そしてその頂点に輝ける宝石のごときダウエス・デッカーを結晶させた。吾々はホ氏からデッカーに到る一連の自由主義大山脈をアジヤにおいて認めることによって、V・O・C時代から産業資本時代への移行を読みとることができる。

前途洋々たる産業資本は当時、まだ重大な矛盾に逢着することなく、自己の対立者を否定することに道徳的指標すら発見した。富と徳の一致をいみじくも歌いあげた産業資本時代の栄光の中に、これらの思想家・実践家達は健康と、その理想主義的であるが故に受難することを恐れず、発言し行動するのである。

3 オランダ本国の事情を概観しよう。この国の繁栄はまさに近世史の奇蹟である。そしてその没落も同様に奇蹟に近い。つまりその繁栄も没落もともに本来の価値を生むものではなく、一方の利益が他方の損害になるという商業体制に依存しきったことに求められる。表現は少々独断的であるが、オランダは国家、つまり領土的延長を持った国家というよりは都市連合の積分にすぎなかったのではなかろうか。即ち、彼女は領土国家として自国内の市場統一を成しとげる以前に、都市国家として早熟したのではなかろうか。十三・四世紀から発生したヨーロッパの都市の発達の焦点として、その集約された典型としての都市があったのである。その盛衰はともに都市としてのそれであった。つまり和蘭はフェ

ニキヤであった。この範囲内において、彼女は英国よりもフランスよりも秀れていた。スミス的国家以前においては、たとえ政治的地位がいかに変化しても経済的なオランダの優位は変らなかった。オランダ史の焦点は一口に言えば、都市連合としての和蘭と民族国家としての和蘭をいかに調和するかにあると思われる。そしてホラント州を中心とした都市を代表する勢力と民族国家的統一体を考えるオランニエ家との間に協調点は発見されなかった。両者の対位法的二重メロディーのかもし出す響きが和蘭特有の音色とみてよいのではなかろうか。⑥

4 Hogendorp, Raffles, Muntinghe, Douwes Dekker の研究は単なる思想史ではなく、第一次的には英蘭両国の比較植民史であり、それは英国のジャワ占領のように抗争史という形をとる。これらの研究はヨーロッパ植民史であると同時に、当然のことながら、アジヤ史と密接に絡み、従来の西洋史・東洋史という分類を便宜的なものとする。何ならば、産業革命以後、世界は一つになり始めたからである。

① Fruin, R., Verspreitgeschrifsen. Hogendorp. 3. p. 127.
② Raffles, Letter to Lord Minto II p. 52.
③ Treggoning, Mordern History of Malaya. p. 46.
④ Hogendorp, Bericht van de togenwoordigen testand der Ba-taafsche bezittingen en handel op. dezelve p. 99. "Handel opchina"
⑤ Gerretson, "Winkler Prins" p. 550.
⑥ Thomas, PJ., Mercantilism and an East India Trade. p. 86.

本　論

1 彼はオランダの植民政策に最初の批判を投げかけた男である。同時に瓜哇人の発見者でもある。クーン、ファン・ディーメンによって象徴されるV・O・C時代は一七八三年、彼の登場によってまさに転換期をむかえようとしていた。彼は不整合のまま、旧来の地層の上に新しい脈層を重ねんとしたのである。①

先駆者の常として、彼は不羈奔放の天才的な人物であった。勿論、その時代には彼の意見をうけいれるだけの地盤はなかったが、彼は物につかれたように瓜哇における和蘭の政策に真向から立ち向った。彼は東インドにおける〃ルッソー〃といっても差支えない男である。彼の行為の中には期せずして未来を内包している天才特有の性質がみられる。そして、それは反対物に遭遇することによって一段と高次の姿に昂められた。彼の家は名門に属し、弟のカレルは後年彼と政治的立場を異にし、どちらかといえば文筆家的な物静かな男であるが、兄のわがデュルクは行動の中に語り、政敵に立向って自己の思想の優越を誇り、その道徳性を誇示する

ことによって闘争を挑むという性質があった。彼の書いたものはミリタントな論争的な性質があり、熱っぽさが感ぜられる。考える前に直感でもって感じとるというタイプの男である。自己の直観を信ずるが故に、それを人に認めさせるために彼は無限の精力を発揮した。また着想の実現のためには軍人らしい猛烈な名誉心にかられて動くのである。この点、オランダ近代最大の文学作品『マックス・ハーフェラール』を瓜哇を舞台にして書きあげたデッカーと酷似している。困難な壁を破るには、特異な人格の特異な活動が必要であった。[2]

彼は物に触れて感じ触発される性質をもっており、必ずしも一定の思想の故に特定の事物に注意を制限するという性質の男ではなかった。彼の書いたものはその時々で自分の地位を弁護したり、政敵を批判したり、鬱憤をぶちまけたりしたもので、自伝すら決して回想的なものではない。自己顕示の手段として烈しい闘争と興奮に中に書かれたものである。燃えたった炎は政敵を焼くこともあるが、時には自らをも焼くという結果になるのである。[3]

現実の利害の中に埋没していては感じることのできない時代精神を、それが表面化する以前に予感し、その予感にもとずいて行動をおこす面が彼には多分にある。彼がルッソーを読んだかどうかは解らない。彼は軍人の学校を出たのであるから、啓蒙思想には必ずしも直結はしなかったであろう。しかし、フレデリック大王の軍隊（彼は大王の下に軍務に服していた）は近代的軍事組織の最初の形態である常備軍による決戦主義を示したのであるから、その点で比較的革新思想に対して寛大であったのであろう。自伝の中には一言のルッソーも発見されない。しかし、名門の家柄に生れ、少年時代に父の蔵書に接していたのであるから、たとえルッソーは知らなくても時代の先端的思想とその息吹は感知していたに違いない。一七八六年にはすでに汎ヨーロッパ的現象として、オランダにも小型フランス革命のようなものが発生しており、デュルクは勿論革命派（愛国党）に心を寄せている。『パルムの僧院』的な経験を若いデュルクは持っていたのではなかろうか。[4]

当時ベルリンにいたオランニェ王妃（彼女はドイツからきた）の推薦で Kweekschool der Cadets（陸軍幼年学校か）に入学、一七七七年、十六歳で少尉となり大王の歩兵連隊に属して東プロシヤに勤務、その間軍事知識のあらゆる面を学んだ。恐らく後年、クラウゼヴィッツの『戦争論』に書かれていることを実地に勉強したのであろう。即ちナポレオン戦術の原型を実践したものと思われる（後日、彼はナポレオン麾下の将軍になっている）。また実践哲学、歴史、自然法、国家形態なども学んだ。「私は大いに知識欲を満足させることができた」と自伝の中で述べている。ドイツの有名

な学者連とも多くの手紙を交換した。大王から信頼されるに相応しい勉強をしたのであろう。[5]

2

時代精神は一見表面をなぜれば多くの矛盾を含んでいるものである。それは国家主義と思想・制度の世界的一般性との間に生ずる。世界的市民思想の中に異質な国家的原始衝動が併存しているからである。すぐこの後、彼は東印度に赴くのであるが、この時の印度行の最大の動機は英国と闘うことであった。「対英戦争」――吾々はここに彼の小ナポレオンとしての姿をみることができる。だが、爪哇にきて彼は想像もしなかった当時の英国の実践しつつあったベンガル経営の進歩性に深く感動してしまうのである。即ち、マンチェスターを中心に世界の工場となった英国が、その販路拡大のため、従来掠奪的蓄財の対象としていた植民地を市場として、原料供給地として全たく異った観点から印度を処理しようとしていたことを彼はいみじくも見抜いたのである。国家の範疇を遙かに越えた労働価値の一般性を実現せんとする英国の産業資本に彼は胸をうたれた。爪哇における彼の言動は一七八六―一七八八年の間に下級商務員（Onderkoopman）として、また第二領事としてベンガルに行った時に深く学んだ結果である。自国の植民地経営と英国のそれとを比較することによって、新しい植民地行政・産業政策を学ぶことができた。英国の新進行政官ラフルス以前に、ラフルスの原型を学んだのである。事実、ラフルスの名著『爪哇史』をみると、到るところで彼の思想が引用されているし、彼の表現を借りたと思われる個所が随所に発見される。[6]

産業革命と仏蘭西革命の波は植民地へ向った一人の男の中に一つのものとなって具体化され始めた。軍人としてのデュルクは対英戦争を想定し、その立場から自己の才能を発揮しようと思ったのである。大王の下に学んだヨーロッパ第一級の戦略思想とそれに附随した新しい思想は、彼自身を将来の大政治家・大戦略家としての夢を持たせるに充分であった。名誉欲の強い彼は東印度の総督になるべく心に夢を描いていた。もし魅せられた思想と時代精神への本能的な憧憬がなければ彼は改革家として苦難の道を歩まなかったであろう。家柄からみても、受けた教育からみても彼には間違いなく高位高官が約束されていた。思想の魅力と行動への衝動は青年をして、その体力が衰えるまで採算を度外視させるものである。吾がD・V・Hはこのような男であった。[7]

V・O・C的雰囲気と啓蒙思想家、農地改革者、現地軍創設者としての立場は両立するものではない。

前印度（Voor-Indië）（セイロン以東のこと）から爪哇に帰った彼はバタヴィヤの前面の海にある『オンルスト島』政治犯収容所の

所長となる（一七八九）。彼の独創的な改革運動がやがて開始されようとしていた。印度にゆく前に結婚、ジャワに帰って一児出産、彼は私人として、公人として活動の連続であった。健康を害し、新しい歴史的行動を起す前に静養を必要とした。「印度行は、私達の幸福な生活を投げ捨てさせた」と彼はいっているが、吾々にとって、歴史にとって彼のベンガル旅行は重要であった。

彼はもっともよい地位を望んでいた、地位に対する執着は想像以上に強烈である。オンルスト島所長は彼には明らかに不満であった。[8]

3 実際の活動は一七九一年、ジャワの中央、ジャパラ地方における行政官になった時に始った。行動と同時に学習もはじめた。この点もフラルスに似ている。新しいアジヤの胎動の開始されんとする時、歴史はホツヘンドルプとラフルスを生んだのである。政策としての民俗学、瓜哇の古い政治形態、言語など、広い意味の歴史を勉強した。従来から存在し、アジヤで一番古い学術機関といわれている『バタヴィヤ学芸協会』が行政上必要な知識を集積することを彼は今後の最も大切な産業の一つだと評価している。彼は植民地を商人の眼、独占根性（monopolie geest）からみるのではなく、近代的な行政官として取あげようとした。その点でも彼は近代ジャワの父といえるだろう。先覚者の学習態度の常として細分化される必要のない学問、綜合民族地理といった種類の仕事をはじめた。後年の代表作『バタヴィヤ領土の現状についての報告』（以後 Bericht と呼ぶ）の中に展開されている意見はこの時の学習の結果に負うところが大きい。これは旧制度に対する戦いの書であると同時に学術の書であり、すぐれて商品学的性質をもった文献である。[9]

活動は二つの面に集中された。第一は支那人問題である。彼等が主として経営する砂糖工場は決して現地人の利益にはならなかった。彼は支那人経営に対抗するため、西印度で成功した方針をとりいれ（苦力式のものか）、新しい労働関係の下に原地人を集め、技術的改良などを加えて可成の成果をあげた。彼ら「旅行者」（支那人のこと）はV・O・Cの財政難につけこんで、農奴付土地を買いとり土地の労働力を完全に喰いつぶす。そこには近代的雇傭関係の片鱗すらない。全たく華僑による強制労働である。和蘭人は独占貿易を守るため、自国人の入植をもふくめて全ヨーロッパ人の来島を嫌い、その代りに柔順な支那人を商業面、流通面で利用した。華僑の寄生は和蘭植民政策の生んだ奇型児である。瓜哇における華僑については別に論考が必要であろう。兎に角、彼はV・O・Cを批判する前にV・O・Cよりも酷い彼等の私領地

の経営に対して文句をつけた。彼ら支那人は現地人に真向から寄生するだけではなく、産業資本の必要とする市場性と真向から対立する要素を持っていた。

ラフルスは支那人について次のような記述をあたえている。彼の記述の中で、ホーヘンドルプから借りたと思われるものが非常に多いが、支那人対策もそのうちの顕著な例である。

支那人は勤勉で重宝がられているが、しかし彼らは実際は非常に危険な連中であり、この国の疫病・ペストのようなものだと記憶されるべき存在である。支那人は蓄財のためには手段については考慮を払わない。[10]

中国人の経営に対する彼の批判は当然自国の爪哇統治政策への批判に根拠を置いている。両者を同時に批判するのは当然のなりゆきである。しかしこの時期はまだ上層部に対しては攻撃的思想はみあたらない。人を駆りたてるためには、もっと時代の衝撃が必要である。

土地制度に対する彼の考えが鮮明な形をとるのは一七九五年以降、一七九八年逮捕されるまでの間であるが、その原型はこの時期にも出ている。ヨーロッパにおける大革命は間接であるが、時にはアメリカ人を介してではあるが、彼の耳には痛いように響いている。その影響をうけて本国が明瞭に革命派（愛国党）と王党に分裂しなければならない情勢も日毎に切迫している。革命前にも彼は革命を予感できたと自負している。革命の意味する新しい土地制度と啓蒙思想は彼の人格を通じて遥か彼方の東インドにおいて実践されようとしている。

将来やがて面前に生起するであろう事柄を前もって予言することができた。[11]

第二は――これは彼を理解する上には一般に書かれている土地制度に対する考え以上に大切なことである――現地軍の編成という事実である。これも一七九四―九八の間の方が積極的になるが、それでも可成顕著な姿をとって現地軍の編成がはじまる。勿論、仮想敵は英国である。英国の植民地経営から深刻な影響をうけたとはいえ、和蘭の栄光を脅かす英国新興勢力は彼にとっては許し難い存在である。この点、彼はクーンの考え方につらなり、またナショナリズムに通じている。東印度行の目的は前述のごとく、対英防禦戦に従事することであった。つまり爪哇防衛軍の指揮官として来島したのである。この点からみて、彼の提唱した土地改革は英国との植民地闘争に勝つための政治的手段ではなかったかと思われる。農地改革のないところに近代的軍隊は成立しないという構想が胸中に塊として形成されていたのかもしれない。英ベンガル軍と爪哇軍が戦争する時のことを考えて、高次の政治戦略的判断から土地問題にとり組んだのではなかろうか。高次の政治

的判断、建軍の精神を脳裏に描いて、そこから流出してきたものが、彼の力説する土地改革であったように思われる。この点について述べた論考は見当らない。だが自伝を注意して読むと両者の連関は一つのものとして理解できる。[12]

4

一七九四年、爪哇東部統監(Gezaghebber van den Oosthoek)の地位につきスラバヤにきた。前期の萌芽はこの時期に成熟する。この時期は仏蘭西革命の波が植民地に現実の姿になって表れる時である。本国は彼の想像していたごとく親英派と親仏派に分裂して相互に国論を二分する。和蘭はナポレオンの保護下におかれてバタヴィヤ共和国が成立、それにともない親英派となったウイレム五世は、英国に亡命するという和蘭史上最大の混乱期をむかえる。これらの動きは当然、植民地人士の間にもその連鎖反応として党派争いを生じさせるのである。[13]

スラバヤにきて、彼は当地の防備状況が全たく悲観すべき状態であることを知る。早速すべてのものを新規にやり直さなければならないと思った。本国が対英戦争状態になるにつれ、植民地においてもそれが現実の姿となりつつある。戦火は時間の問題となった。英軍のオランダ侵攻も日程にのぼっていた。

軍司令官の地位にあった彼は対英戦争を遂行する準備をはじめる。本国からきた軍隊だけではジャワの防衛は不可能である。どうしても土地改革という政策を背景にした現地軍の創設が必要である。土侯との契約による兵員徴集権だけに頼るのでは心細い。彼の胸中には市民軍のような構想があったのであろう。彼の行為の中で、この構想は可成重要であって、決して土地改革と建軍を二分して、前者を優位におくという性質のものではなかった。軍隊の編成は軍人としての彼の面目を最もよく表明したもので、このことから土地改革が必要となってくるのである。もし一八一一年をまたずに、この時ラフルスが侵攻していたならば、彼は所謂「解放された」軍隊で戦ったことであろう。そうすればナポレオン戦争と同性質の戦争が東南アジヤで始ったことであろう。

彼は軍人としても当代一流の男である。その底には革命精神があったのであるから、その点、彼は徹底的に革命軍人であり、ナポレオンと同様、革命の申し子であった。[14]

創設された軍隊は少くともその成員が軍隊に利害を感ずるよう準備されているのであるから、烏合の衆ではなかった。土地と自己の財産を守るための軍隊(少々大げさな表現である。現地でヨーロッパ風の市民軍ができるとは信ぜられないが、本人は大真面目である)であるから、単なる物理的尖端衝撃力だけの要請で作られたものではなかった。

私はあらゆるものを改革し、あらゆるものを変化させた。所謂、現地軍といっても、決して装備もない、また情報すらあたえられない寄せ集め、駈け出し軍ではなかった。[15]

と彼は誇っている。

彼のこのような行為は最早、V・O・Cの概念から遙かに離れている。建軍の本旨自体が極めて近代的であり、完全に思想として市民軍に属するものである。比喩的にいうならば、ジャコバン軍であった。彼はジャワのダントンであり、ナポレオンであり、ルッソーであった。往々にして人々は彼を突ッぴな男とみやすいが、この点から彼の像を彫りあげるならば実に堂々とした姿が浮びあがってくる。（彼は缺点の多い男であったらしく、八方破れ型であるが故に悪怨のわなに容易にかかり、その度毎に興奮しなければならなかった。ネーデルブルフという高級行政官との口論は結婚問題とも絡んで泥仕合の様相を示した。オランダ人内部の政治的腐敗を指摘したことも感情的な刺戟を上層部に与えたように思われる。）

彼の自筆にこれ程明かに建軍のことがのべられているのに、解説書や通史、彼のことを書いた史書に殆んどこのことが述べられていないのは少々不思議である。彼を単なる先駆者として取扱い、口禍にかかって地位を追われたことに同情しているような書振りばかりが見られる。

彼は必ずしも上級の賛同を得ないで土民に武器を持たせたのである。武器所持と密貿易は最大の国事犯である。彼はこれを対英戦争の必要から敢然として実行したのである。人道主義的立場から少々すぎ勝手なことを言ってもそれは別に問題にはならなかったであろう。すこし色の異ったレッテルをはればそれで事は処理できる。だが軍司令官の地位にある男が、バタヴィヤ中央の意見を無視して建軍と土地改革論を大上段に振りかざして述べるのであるから、それがたとえ対英戦争の準備としてなされたにしても、一般の考え方とは容易に相容れないものを含れでいた。

当時の瓜哇の首脳者達は積極的な対英戦争に踏み切るのに大いに躊躇してる。本国が仏蘭西の保護下に置かれたとしても、それ故に直ちに植民地においても対英戦争にはいることはなお慎重を要することであるし、英国は手をつくして、もし海外の領土を仏蘭西に支配されないために一時的に英場の保護下におくならば、対仏抗争の終結した後にはそれらをオランダに返却するという約束を[16]（キュー書簡）、本国が仏蘭西に占領された結果英国に亡命していたウイレム五世との間にとりつけたのである。だから現地が和戦の岐路に立って迷ったのは当然である。たとえば、ケープにおいてはオランダ守備軍は積極的に闘ったが、モルッカでは和戦の判断がつかず、そのまま英国に占領されている。

かかる状況の下で、旗色鮮明に断乎戦う体制を示し、それに躊

躇するものを彼は烈しい言葉で攻撃し名を示して槍玉にあげているのであるから首脳者間では、一方では迷いながらも彼の意見行動をそのまま見逃すことはできなくなったのである。

何はともあれ、海外における英国との抗争は不可避であり、いかなる形態をとるにしても必ず表面化することは必然の数である。そしてそれはまた誰の目にもあきらかであった。少くとも本格的に軍事行動によって英国の優越を押え、和蘭の栄光を保持するためには、ホーヘンドルプの採用した手段以外になかったことは言えると思う。

彼は建軍思想、対英戦争の立場からV・O・Cの独占政策に反対したのである。戦略が彼の第一義的な行動源であった。彼の最もよき解説者、Du Roos が「軍事教育が彼に終生つきまとったに違いない」と評論しているのは充分に首肯しうる卓見である。彼の言う道徳政策、『原住民の福祉』ということも、ここから考えなければ、吾々は彼を文筆家、牧師、弁論家とみあやまってしまうであろう。[17]

一七九五年、本国にできた新憲法は大革命の精神を具体的に表明したものである。彼はジャワにあってこの報に接し、「新しい時代が始った」と、ゲーテのように叫んでいる。彼にとって建軍の精神と土地改革は時代精神の深層において一体のものであった。彼の思想と行動はこの深層に根ざしたものである。自伝の中で自ら新憲法を解説し、あたかも自分のせんとすることは時代精神と一致していることを証明しようとするものだと誇り高く述べている。

「自由なる市民のよろこびと満足の表現である新憲法の根本精神は東インドの利害などを問題とせずに導入された」「すべての人に自然があたえた疎外されない権利[18]」

という言葉が使用されている。

新憲法ができ従来のV・O・Cは解散、インド問題委員会が生れた。(Commissie van Oost-Indische Zaaken)この中で彼は一時指導的発言をしているのである。彼はこの機会に『メモワール』を書いている。(仏文は彼の得意とするころである。フライン著『ホッヘンドルプ』によると、彼の教養は徹底にフランス的であるという。弟カレルとの往復書簡も殆んど仏文でかゝれている。)内容は原文が入手できないので解らないが解説文があるので引用する。

これは広い視野から植民地支配に関する近代的制度について述べたものである。[19]

恐らくこの中に後年の「バタヴィヤ領土に関する現状報告」の原型が示されているものと思われる。

本格的な土地改革、支那人対策、授産殖産運動がすすめられたのは『メモワール』の前後であろう。

「私は製材所を作り改良した。私は土地から強盗共（恐らく支那人のこと——自註）を追い出した。そして清潔にした。造林計画をたてた。苗木をうえ草むらを取り払った。私自身コーヒと胡椒をうえ、土人行政官を督励した。」「私は常にモノポリーを否定した。あらゆる排他的商業に反対した」[20]

瓜哇が英国から自由であるためには従来輸入に依存していた火薬を現地で作る必要がある。彼は軍艦すら現地で作れる筈であると力んでいる。彼は硝酸工場を信ぜられないような努力と費用を投入して作った。とに角、防衛と生産と道義の三者を一つにして、それを目標に彼は最大の努力を投入するのである。そして、「私はこれで敵の来寇に備えることができた[21]」と自負する。

5

彼には危機が迫っていた。第一の原因は従来の植民政策に対する真向からの批判であり、第二は前述の『キュー書簡』の結果、対英主戦論と対英慎重論に分裂し大勢はやがて慎重論に傾く時に彼はあくまで主戦論を展開したことである。英国の攻撃をうけて充分戦わずモルッカ群島バンダを放棄した司令官ブックホルトを痛烈に槍玉にあげることによって首脳部との衝突は不可避となった。この際、ブックホルトと首脳部との間の腐敗汚職をも合せてとりあげ、その道徳的資質をも問題とした。

「瓜哇の防衛と安全のため、また会社の利害をも考えて様々と努力したにも拘らず、始めからあらゆる手段で私は批難された。私を残念がらせた汚い軽蔑すべき批難文に対しては、私は他の機会に返答しておいたので、今はそのことは最早書かないでおこう。[22]」

と言っているところをみると、彼の対英主戦論は派閥的分裂を背景にして、当時の首脳者を最早放置できない段階までおいこんだのではなかろうかと想像される。反対派は彼を国賊のようにいい、祖国に対する忠誠を疑うかのように彼に批難をあびせた。しかし、愛国心そのものが、本国においても植民地においても分裂しているのである。

「どうして祖国に反抗できようぞ。[23]」

「私は若い時から Prinses vau Oranje（ウィレム五世の妃）の世話になり、東印度にきたのも彼の推薦である。彼に私が何も負っていないし、感謝もしていないとすれば私は恐らく不届な男である。[24]」

と弁明につとめているが、今や彼の立場は明かにウイレム五世の政治的立場と真向から対立せざるをえない結果となった。彼はいかに自己弁護をしても、V・O・C的行政には妥協しなかった。彼はどこまでも時代精神に指導されて歩んだのである。名著「インドネシヤ経済史」を書いたライデン大学のホングレイブ氏の言をかりれば、

ラフルスにおいて再び見出すことができ且、ずっと後年において漸進的に適用されるに到ったかの思想を展開したのである。[25]

突如、一七九八年一月一日、彼は逮捕された。バタヴィヤへ、家族をのこしたまま軍隊に護送されるという事件がおこった。しかも彼は何らの弁護の機会もあたえられないまま五ケ月間幽閉される。自伝では逮捕の理由については書いていないが、それは最早自明である。前記ブックホルトのバンダ島放逐に対する批難である。[26]

彼の逮捕は対英慎重論の勝利であると同時に、植民政策が旧来のままを踏襲することをも意味する。

瓜哇の改革を彼は断念しなければならなくなった。東インドにおいて彼に残された仕事は自己の思想の優越性を証明するために筆をとることであった。監禁中に彼は自伝の形で文を草した。これが『デュルク・ファン・ホーヘンドルプの生涯についての概略』(Korte Levensschets van Dirk van Hogendorp) である。自伝は次のような悲痛な言葉で終っている。

私は私に加えられた罪状に対して充分なる責任を果すため抗議する。今日で解任・逮捕されてから九〇日となる。私の書類は没収され、且捜索された。しかも私は未だに何故罰せられたのか、誰が告発人であるかも知らない。[27]

彼は悲憤のうちに本国へ帰る。本国で正当な裁判をうけることが当面の理由であった。船中において彼の書いたものの中で一番有名な"Bericht……"を一七九九年に完成、世に公表された最初の戦闘的な内容をもった作品で、東印度の実際と未来像を共に描きあげ、本国の人士に大きな感銘をあたえた。勿論文学作品ではないが、『マックス・ハーフェラール』と共に和蘭が作り出した近代の最も重要な文献と一般に考えられている。信夫氏によると"Bericht"の与えた衝激の方が大きかったらしい。信夫氏は勿論原文は読んでいないのであるから、彼の判断の根拠は不明であるが。この作品は彼の意図と関係なく、新しい植民地論の出発点となった重要なものである。

6

この作品について評論を加える余裕はないが、ホーングレイブ氏の叙述を借りて概観してみよう。

イギリス人がベンガルにおいて非常な成功をもって試みたごとく、一般ジャワ人に土地の所有権を、また永代借地権をあたえ、且すべての賦役 (Heerendienst) を廃止することを彼は提唱した。[28]

彼はベンガルで、土地所有を確保せられた原地人が一定の地代を納めた後に得た収入によって英国商品を購入しうる状況に移行しつつあるのを観察したのであろう。つまり旧来の東印度会社的な手段による植民地の窮乏疲弊は植民地経営上、好ましくないという産業資本の要請が従来の方法では考えられない道義的性格をその属性としてもっていることを見抜いたのである。この実際の体験が、彼のいだいていた大革命による土地制度と見事に一致し

たのであろう。ベンガル方式とジャコバン方式を一つにして彼はそれらを爪哇の現実に適用せんとしたのである。この書の本質はこの辺にある。

レヘントと称せられる現地の〝殿様〟が土地、人民を支配していたので、これらを政府の官吏に作りかえ、和蘭政権と個々の生産者を地代を通じて直結しようとしたのである。つまり一種の『版籍奉還』を考えたのである。

従来、割当を徴し、意の儘に人民を労役に利用していたレヘントらは一定の年金と数コヤンの米を受領すべきである。[29]

政府の収入については、彼は「土地からは生産物の一般的現物税と、人からは人頭税」を考えた。その代り、「ジャワ人は一切の夫役から解放されるべきである」し、「土着民は商業と移住の自由を回復すべきであり、土地に対する確乎不動の権利をあたえ、且、個人化を徹底させる」ことを考えた。

それ故ホーングレイプ氏は明解にホーヘンドルプについて次のように結んでいる。

当時の東インド政府は彼の思想を実現するに必要な実力を殆んど持ち合せず、一世紀たってようやく実現された始末である。[30]

① Du Roos, Opmerking voor "Correspondentie van Dirk" B. K. I. vol. 102 p. 125.

② Du Roos,op. cit., B. K. I. p. 126; Woorden Boek; Hogendorp vol. VII p. 609.

③ Correspondendie van Dirk van Hogendorp mot zijn brooder Gijsbert Karel. B. K. I. vol. 102 p. 127.

④ Du Roos, op. cit., p. 127; Korte Levens Schestsvan Dirk van Hogendorp. B. K. I. vol. 102 p. 195.

⑤ Ibid., p. 194.

⑥ Du Roos, op. cit., p. 127; Korte, p. 197 Woordenboek, vol. VII 609; Gonggrijp, Schets eener economische geschiedenis van Nederlandsch-Indie, Indie, p. 58.

⑦ Du Roos, op. cit., p. 126.

⑧ Korte, p. 198.

⑨ Ibid., p. 200.

⑩ Raffles, Letter to Lord vol. II minto.

⑪ Korte., p. 203.

⑫ Ibid; p. 201.

⑬ Ibid., p. 203, 203.

⑭ Ibid., p. 202.

⑮ Ibid., p. 209, 205.

⑯ ウィレム五世による英蘭間の海外領土に関する約束文書を『キュー書簡』(Brieven van Kew) と呼んでいる (1795. 2. 7)。この文書は英蘭抗争史を解明する重要な文献である。残念乍ら原文を入手することはできなかった。ウィレム五世が英国にあって総督としての立場から海外にある和蘭官憲に対して対英抗争を中止するよう呼びかけたものである。英仏両勢力の間にある和蘭は、この書簡によって一つの定まった方針を失う結果となる。本国ではこれによってウィレム五世を死罪に値する反逆行為であるという意見が支配した。宿敵英国に和蘭を売渡す売国行為

であると判断された。国論は更に分裂の度を増し、結果として親英・親仏の二つに色分けされることになった。

⑰ Du Roos, op. cit., p. 126.
⑱ Korte., p. 205.
⑲ Woordenboek, op. cit., vol. VII p. 610.
⑳ Korte., p. 201, 207.
㉑ Ibid., p. 201.
㉒ Ibid., p. 202.
㉓ Ibid., p. 197.
㉔ Ibid., p. 197.
㉕ Gonggrijp, op. cit., p. 62.
㉖ Du Roos, op. cit., p. 125.
㉗ Korte., p. 212.
㉘ Gonggrijp, op. cit., p. 63.
㉙ Ibid., p. 63.
㉚ Ibid., p. 64.

今後の研究目標について

1 "Bericht……" の完訳である。最近ハーグの国立文書館から入手したので、本稿には充分に間に合わなかった。解説されているように立派なもので、商品学的性質を帯びている。人々の心を惹きつけたのは彼の改革論と同時に、V・O・Cによって閉されていた東印度の事情が、彼の産業に対する詳述な報告によって本国の人達に今更のごとく新しい情報として提供された点にあると思われる。

2 彼の編成した現地軍の性格である。これに関しては今のところ解明の手がかりがみあたらない。

3 マックス・ハーフェラールの研究である。これは文学作品であるから、自分の手には少々負いかねる。ただその歴史的背景である『強制栽培制度』をみてみたい。

4 フーフェルの研究である。彼は牧師として東印度に赴き、主として人道的立場から植民政策の転換を要求する。本国では代議士の資格で時の政府に倫理的政策（Ethiek Politiek）を要求する。

参考文献及び年譜

1) Correspondentie van Dirk van Hogendorp met zijn broeder Gijsbert Karel
2) Bericht van den tegenwoordigen toestand der Bataafsche bezittingen in Oost-Indie en handel op dezelve
3) Stukken, rakende den togenwooridigen toestand der Bataafsche bezitting in Oost-Indie
4) Korte Levens Schets van Dirk van Hogendorp (Bijdragen tot de Taal Land en Volkenkunde van Neder-

landsch Indie)
5) Ontwerp Charter
6) Memoir in 1796
7) Du systeme colonial de la France sous les rapports de la politique ot du commerce
8) Memoir in 1817–1822
9) Gonggrijp: "Schets eener economische geschiedenis van Nederlandsch-Indië" (1928)
10) R. Fruin; Verspreid geschriften "De memoires van Dirk van Hogendorp" (1887)
11) Du Roos; Opmerking voor "Correspondentie van Dirk van Hogendovp
12) E. du Perron; "Zich doen gelden" onvoltooide Roman (1940)
13) Pierre Melon: "Le General Hogendorp"
14) Bijdragen; Vol. 79 "De wooning van K. v. H. in Brazilie"
15) Nieuw Nederlandsch Biografsch Woorden Boek "D. v. Hogendorp"
16) Winkler Prins "D. v. Hogendorp"
17) Het nieuw Zoek-Licht "D. v. Hogendorp"
18) Algemeene Geschiedenis van Nederland
19) Kolenbrander
20) Encyclopedie van Nedevlandsche Oost-Indie
21) 信夫清三郎「ラフルス」

一七六一　誕生
一七七三　陸軍幼年学校
一七七七　少尉
一七七八—七九　大王の軍隊に所属東プロシヤ転戦
一七八〇　中尉　擲弾筒連隊
一七八二　退役　大尉
一七八三・一　海軍陸戦隊の指揮官として東インドへ
弟 Karel との往復書簡はじまる（一七八三・二—一七九七・三）
一七八四・三　バタヴィヤ龍騎兵連隊の司令
一七八五・一二　結婚
一七八六・八　V・O・Cの下級商務員としてベンガルのパトナに赴く
一七八八・一二　バタヴィヤに帰る

一七八九・一二　オンルスト島行政官　ネーダーブルフ来島
一七九一・六　ジャパラの行政官
一七九四・四　ジャワ東隅司令官　スラバヤにくる
一七九五　バタヴィヤ共和国誕生（本国、ナポレオンの保護下）
一七九五・二　キュー書簡
一七九六　メモワールを書く
一七九八・六　「D・V・Hの生涯に関する概略」（自伝）をかく
一七九九・一二　船中にて「バタヴィヤ近郊の現状報告」を作る
一八〇一―一八〇四　弟の Karel 彼の全集を出版
一八〇三　植民地委員会のメンバーとなる
一八〇七　デンデルスに代って東印度総督になろうとしたが、失敗
一八〇七　ルードウィッヒ・ナポレオンに才能を買われる
一八一一　ナポレオン直下の将軍となり、伯爵の称号をえる。彼の絶頂時代
一八一二　モスコー遠征の時の補給関係の司令官としてコーニンクスベルゲンにあり
一八一三　ブレスローの施政官
一八一七　失意の底に苦しむ。彼を使うものは誰もいない
一八一七　ブラジルに逃げて、農園経営
一八一七―一八二二　メモワールをのこす、ナポレオン、セントヘレナーより彼に年金をあたえる
一八二二　ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ近くで死す。墓石に次のごとく書かれている。

デュルク・ファン・ホーヘンドルプ
(1761―1822)
……
オランダ人
植民地改革者
ナポレオン直下の将軍
ここに眠る

（尼崎工業高校教諭）

Thoughts and Deeds of Dirk van Hogendorp

——a fragment of the Dutch Coloniol history——

by

Yasuo Tabuchi

This short treatise covers the thoughts and deeds of General Hogendorp, who gave an effort to the renewal of the administvative metheds of colonial territories, animated by the new philosophy and new trading and commercial ideas.

In the history, from the middle of the 18th to the beginning of the 19th century, we are able to retrace the serious upheaval, excitement and agitation in the Malay Archipelago and the Indian Waters, which were mainly originated by the influences of the historical movements in Europe.

The United Provinces, the old colonial Empire, which had been maintaining the supremacy for more than two centuries, building up the *Empire of the Isles*, fluttering her flags at the factories all over the world, without the exception of that at Nagasaki, was laid under the protection of Fance after the invasion of the French Revolutionary Armey in 1795. Consequently, the Dutch country was under the condition of confrontation with Britain against each other, which caused to be the relative decline of Holland in Europe as well as in South East Asia.

These historical phenomena show us that the indestrial capital, backed by the new manufacturing system, occupied the place once held by the trading capital. *The Dutch East India Company*, which had been dependent not so much upon the manufacturing system, as mainly upon the transit trade or *the trading system* always managed by the Regent Families, was unable to maintain its tradtional system in the face of rise of the British activities, and was forced to change its conventional policy.

Recently, in oversea's countries, as the results of releasing the documents which had been accumulated for several centuries, the researches of the colonial history, in accordance with rise of Nationalism in Malay world nowadays, have been popular year after year. In our country, also, the objective situations of stimulating the investigation of colonial affairs has been becoming ripe and mature.